



28. カラフトマス *Oncorhynchus gorbuscha* (Walbaum) 図版11

英名 pink salmon, humpback salmon

露名 ガルブーシャ
горбуща

地方名(北海道) マス、アオマス、セツパリマス、セツパリ、ホンマス、
ラクダマス、ラクダ、カニマス、オオマス、カンマス

漢字 からふとます あおます セツぱり ます ほんます
樺太鱒、青鱒、背張り鱒、本鱒

アイヌ語名 トピリ、エモイ、ヘモイ

【形態】 あぶら 背部は濃青色から青緑色、体側は銀白色、腹部は白色。背部、尾びれ、脂びれに大きな黒点があり、特に尾びれの黒点は楕円形で大きい。産卵期の雄は体が側扁*し、背部前方が盛り上がる「背張り鱒」となる。せつぱり 吻*は伸びてかぎ状となり、背部から体側は赤紫色が混じった茶色に変わる。一方、雌は性成熟*しても体形が変わらず、体色が変わる程度。成魚*はふつう尾叉長*45~60cm、体重1.0~2.5kgになり、雌の平均は49cm、1.3kg。

カラフトマスの稚魚*はサケの稚魚によく似るが、カラフトマスは体側にパーマーク*がなく、尾びれの後縁が黒くないことでサケと区別できる。

【生態】 北緯36度以北の太平洋、ベーリング海、オホーツク海、日本海と北極海の一部に分布。せじょう 遡上*する河川は、アジア側は朝鮮半島東部からシベリアのレナ川まで、北米側はカリフォルニア州のサクラメント川からカナダの

マッケンジー川まで。資源量は北米側よりもアジア側のほうが多い。国内では北海道のオホーツク海、根室海峡、太平洋、北海道北部の日本海に注ぐ河川に遡上するが、数が多いのはオホーツク海と根室海峡。

カラフトマスには、生まれた地域ごとに独自の回遊*範囲を持ついくつかの系群*が想定される。このうち北海道生まれのものは、カムチャツカ半島西部やサハリン東部、沿海地方からオホーツク海北部沿岸の川で生まれた魚と同様に、北海道から2,000km以上離れた東経175度付近まで回遊すると考えられている。

なお秋から春にかけて日本海でみられる魚は、北海道産ではなくアムール川をはじめ沿海地方やサハリン西部の川でその約1年前に生まれたもの。

海でひと冬越した成魚は、8～10月に北海道の河川に上る。産卵は9～10月、主に中・下流域で行われる。サクラマスのように上流域まで上ることはあまりない。

雌が砂れき*の川底に産卵床*^{しよう}を掘り卵を産むと同時に、ペアとなった大型の雄のほか、周囲に群らがる雄も一斉に放精する。産卵後、雌は産卵床を埋め戻し、ほかの雌が掘り返さないように守るが、やがて雄と同様に死ぬ。雌1尾の産卵数*は1,000～1,600粒。卵は橙赤色で直径約6.4mm。

受精から積算水温*400～500°C・日ほどで卵がふ化し、仔魚*^{しぎよ}はその積算水温が900～1000°C・日ほどになる4～5月に尾又長3cmほどの稚魚となり、川底から抜け出て泳ぎ始める。稚魚は浮上*するとほとんど餌をとらず、すぐに川を下る。降海*は日没から早朝にかけて活発で、ひと晩から数日で海に出る。

海では初め岸のごく近くにとどまり、小型のカイアシ類*を餌とする。その後しばらくはカイアシ類やヨコエビ類*などを餌として沿岸域で生活するが、成長とともにやがて沖合域へと移動する。沖合域での餌はオキアミ類*、ヨコエビ類、カイアシ類、魚類、イカ類^{いかに}など。海洋で約1年過ごし、尾又長45～60cmに成長したカラフトマスは母川*すなわち生まれた川へと向かう。

カラフトマスが母川に戻る習性は、ほかのサケ・マス類ほど強くないといわれる。河口に戻ってきた親魚に標識*を付けて放流したところ、別の川で相当数が再捕*された。また、稚魚の段階で標識放流*した場合には、回帰時に母川以外の川に迷い込む確率は1割以下、しかも母川近くの川に限られるというケースから、数百kmに及ぶ広範囲の迷い込みが確認されたケースまで、さまざまな結果が得られており、実際のところ母川回帰性の程度はあまりよく分かっていない。